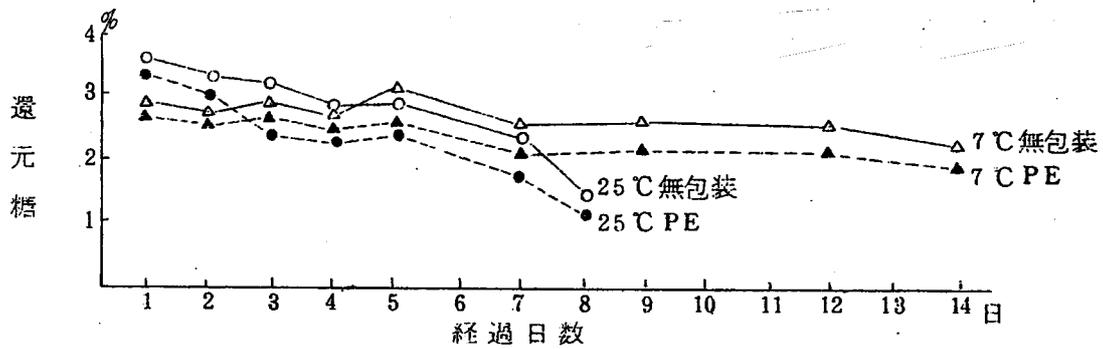


第4図 還元型ビタミンCの変化 (mg/生100g)



第5図 還元糖 (%) の変化

6 半促成イチゴの植付け株数

1 背景と特徴

県内の半促成イチゴの植付株数は10a当たり、5,000株ぐらいから8,000株ぐらいまでである。疎植の例の多いのは主に、イチゴの草姿が過繁茂状態になるためと考えられる。当分場では過繁茂制御等を目的に、ハウスビニール被覆の早期化の試験を行い、その結果ハウスビニール被覆（外部被覆）時期と内部トンネル保温（内部保温）時期を適切に組み合わせることで、3月どり～5月どりに至る各作型で好適な草姿が作出でき、品質、収量の向上に結びつくことが判明し参考に供した。

この早期被覆試験の一環として過繁茂制御下での植付株数について検討を行った結果、6,000株以下の疎植よりも8,000株以上の密植の方向に好成績が得られたので参考に供したい。

2 技術内容

(1) 破芽仕立を1～2コとする場合は10a当たり植付株数は8,000株でよい。

○ 畦巾135cm×株間18.5cm2条植、条間35cm（間口5.4mのパイプハウス）

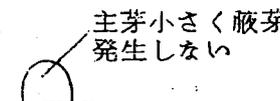
- 畦巾 112.5 cm × 株間 22.2 cm 2 条植、条間 30 cm (間口 4.5 m のパイプハウス)

- 芽仕立 (越冬前、12月上旬頃の時点)  

(2) 越冬前に腋芽発生の見込みの立たない場合 (例えば弱小小苗植や定植遅れなど)、又は品質重視で、芽仕立を主芽のみとする場合は 12,000 株が有利である。

- 畦巾 135 cm × 株間 12.3 cm 2 条植、条間 35 cm (間口 5.4 m のパイプハウス)

- 畦巾 112.5 cm × 株間 14.8 cm 2 条植、条間 30 cm (間口 4.5 m のパイプハウス)

- 芽仕立 (越冬前、12月上旬の時点)  

3 普及上の留意点

- (1) 以上の技術は過繁茂制御を前提にする。

好適草姿を作る外部被覆時期と内部保温時期の組み合わせは次を目安にする。

3月～	外部被覆 5℃以下低温量 600 h	内部保温 5℃以下低温量 600 h
4月どり	平年的には 12月下旬	平年的には 12月下旬
4月どり	外部被覆 5℃以下低温量 400 h 位	内部保温 5℃以下低温量 700 h 位
	平年的には 12月中旬	1月上旬
4月～	外部被覆 5℃以下低温量 200～300 h	内部保温 5℃以下低温量 800～900 h
5月どり	平年的には 12月上旬	1月中旬
5月どり	外部被覆 5℃以下低温量 100 h 以内	内部保温 5℃以下低温量 1,000 h 位
	平年的には 11月下旬	1月下旬

(低温量に該当する時期は大船渡地方の平年的時期、5℃以下の低温量はイチゴの株が受けた低温量を意味する。)

- (2) 良い腋芽を 1～2 コ立つようにするには定植時期と苗の大きさに留意して定植すること。

苗重 10 g (9月10日頃で) 前後の苗は、9月10日～9月20日に定植する。

苗重 20 g (") " 、9月20日～9月30日 "

苗重 30 g (") " 、9月30日～10月10日 "

(定植時期は大船渡地方で現してあるので、それぞれの地方でかんあんする。)

- (3) 品種はダナーの場合とする。

4 試験結果の概要

- (1) 試験課題名 半促成イチゴのハウスビニール早期被覆に関する試験
栽植株数試験

(2) 試験年次および場所 昭和51年、52年 岩手園試南部分場

51年試験

試験区 10a 当たり株数 ① 4,000 ② 6,000 ③ 8,000 ④ 10,000

供試苗と芽仕立 大苗 10本重 450g、主芽+腋芽 2コ

品 種 ダナー

定植月日 9月19日

栽植距離 4,000株 畦巾 135cm × 株間 37.0cm 2条植、条間 35cm

6,000株 畦巾 135cm × 株間 24.6cm //

8,000株 畦巾 135cm × 株間 18.5cm //

10,000株 畦巾 135cm × 株間 14.8cm //

被覆保温時期 外部被覆 12月10日 (5℃以下低温量 313h)、内部保温 1月10日
(5℃以下低温量 784h)

52年試験

試験区

10a 当たり株数	腋芽と苗の大きさ	腋芽と苗の大きさ	腋芽と苗の大きさ
4,000株	① 2コ、大苗	② 4コ、大苗	③ 放任4.8コ、大苗
6,000株	④ 1コ、中苗	⑤ 3コ、大苗	⑥ 放任3.9コ、大苗
8,000株	⑦ 0コ、小苗	⑧ 2コ、中苗	⑨ 3コ、大苗
12,000株	⑩ 0コ、小苗	⑪ 1コ、小苗	⑫ 2コ、大苗

供試苗の重量 大苗 10本重 500g 中苗 300g 小苗 200g

品 種 ダナー

定植月日 9月20日

栽植距離 4,000株 畦巾 135cm × 株間 37.0cm 2条植、条間 35cm

6,000株 畦巾 135cm × 株間 24.6cm //

8,000株 畦巾 135cm × 株間 18.5cm //

12,000株 畦巾 135cm × 株間 12.3cm //

被覆、保温時期 外部被覆 12月16日 (5℃以下低温量 600h) 内部保温 1月5日
(5℃以下低温量 942h)

(3) 試験結果 (2カ年の結果)

生 育

51年度は草高 20~23cm 程度であったが、52年度は 25~33cm で繁茂傾向であった。

収 量

- 1) 4,000株<6,000株<8,000株<10,000(又は12,000)株の順で、10a当たり株数が多い区ほど収量が高い傾向がみられた。(s51年、s52年とも)
- 2) 8,000株と10,000株の収量差(s51年)、又は8,000株と12,000株の収量差(s52年)は4,000株と6,000株の収量差、6,000株と8,000株の収量差より、少い傾向がみられた。(s51年、s52年とも)
- 3) 4,000株の各区分、腋芽2コ区、4コ区、放任4.8コ区間に収量差が認められなかった。6,000株の各区分では、放任3.9コ区が収量が高かった。
8,000株の各区分では腋芽0コ区<1コ区<3コ区の順であった。12,000株の各区分でも同じような傾向であった。(s52年の結果)

品 質

- 1) 4,000株、6,000株、8,000株、12,000株の各区分内とも、平均果重、大果率とも、腋芽数の増えるほど低下することが認められた。
- 2) また腋芽数の多い4,000株、6,000株の各区よりも、腋芽数の少い8,000株、12,000株の各区が平均果重の高いことが認められた。
- 3) 12,000株の腋芽0区が平均果重14.9g、大果率68.2%で最も高かった。

以上から草勢制御下での植付株数は、収量、大果重両面とも、6,000株以下よりは8,000~12,000株が有利である。特に品質重視の場合は、腋芽0コで12,000株が有利と思われる。また腋芽を立てる場合は8,000株と10,000~12,000と収量差があまりないことと苗の準備が多であることから、8,000株ぐらいが妥当ではないかと思われる。

なお疎植にして腋芽数を増やしても収量があまり上らないことから、イチゴの株の果実負担能力には限界があり、栽植株数の多少による大きな差がなく、腋芽数にして2~3コ位が限界と思われる。そして、52年の結果からでは、株数の如何に拘らず、平均果重13g以上期待する場合は腋芽は2コ以内と思われ、平均果重14g以上、大果率60%以上を期待する場合には腋芽数は1個以内にとどめるのが良いと思われる。

(4) 主要成果の具体的データ

1) 生育調査 (S 52年)

(10株平均)

区番	項目 区別	越冬前の調査 12月2日				収穫期調査		5月17日	
		新生葉数	左の最大葉 葉身長×葉幅	クラウン の直径	腋芽 仕立数	草高	葉柄長	最大葉 葉身長×葉幅	
1	4,000-2	枚 5.2	cm. cm 6.2 × 5.6	cm 2.93	コ 2.0	cm 24.9	cm 19.5	cm cm 8.8 × 8.3	
2	4,000-4	6.2	7.0 × 6.5	3.42	4.0	25.2	21.1	8.5 × 8.3	
3	4,000-放任	5.8	7.0 × 6.8	3.26	4.8	29.5	22.0	8.1 × 7.7	
4	6,000-1	5.5	6.3 × 5.4	2.54	1	30.2	23.3	9.4 × 8.9	
5	6,000-3	5.3	6.4 × 5.8	2.86	3.0	26.4	21.1	8.4 × 7.7	
6	6,000-放任	5.3	6.3 × 5.4	2.93	3.9	26.7	20.4	8.3 × 7.5	
7	8,000-0	4.4	6.0 × 5.6	2.41	0	29.8	22.5	9.2 × 8.4	
8	8,000-2	4.9	7.3 × 6.9	2.60	2	31.3	25.6	9.0 × 8.5	
9	12,000-3	5.3	6.8 × 6.1	2.90	3	25.8	21.1	8.0 × 7.1	
10	12,000-0	4.0	5.3 × 5.2	1.97	0	26.7	21.6	9.1 × 8.5	
11	12,000-1	4.0	5.6 × 5.1	2.04	1	27.1	20.9	8.6 × 8.4	
12	12,000-2	4.9	7.0 × 6.4	2.51	2	33.4	26.2	10.0 × 8.2	

(本年は外部被覆と内部保温の組み合わせを、遅い時期のもので行なった。茎葉が過繁茂傾向であったので、各区とも開花期に中心の徒長葉を4~5枚抜き取った後の調査)

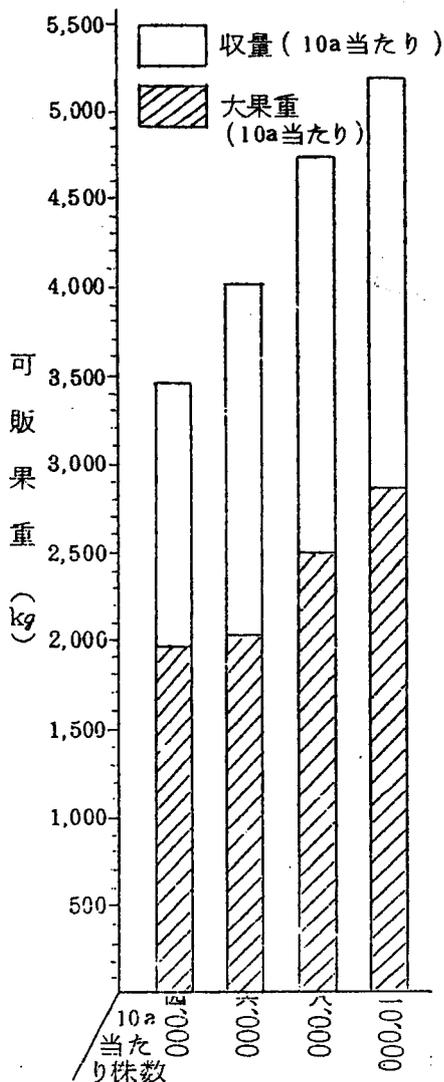
2) 収量、品質 (S 51年)

株数 10a当たり	平均果重		大果率		良果率	収量	
	可販果	全果	可販果	全果		10a当たり	指数
4,000	g 13.3	g 12.6	% 56.8	% 54.3	% 95.7	kg 3,486	86
6,000	12.6	11.5	50.2	46.4	92.5	4,039	100
8,000	13.0	11.8	52.6	48.5	92.1	4,755	118
10,000	12.9	11.9	55.2	51.3	93.0	5,194	129

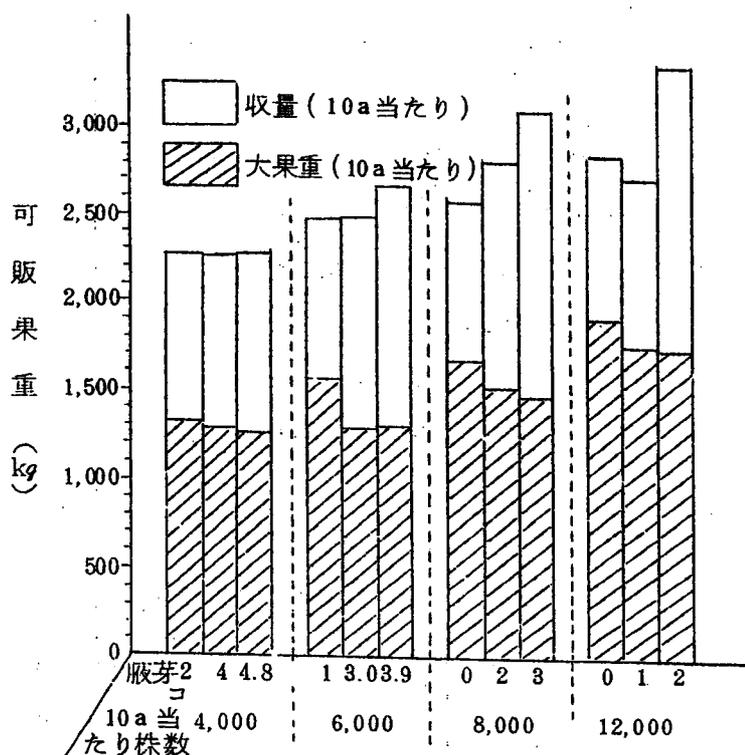
3) 収量、品質、総括表 (S 52年)

区名	項	平均果量		大果率		良果率	収量(可販果)	
		可販果	全果	可販果	全果		10a当たり	指数
4,000株	腋芽 2コ	g 13.4	g 10.8	% 58.9	% 51.3	% 87.0	kg 2,276	92
	" " 4	13.0	10.4	56.7	47.3	83.5	2,275	92
	" " 放任 4.8	13.0	10.4	56.0	46.3	82.6	2,277	92
6,000株	腋芽 1	13.9	12.0	64.3	57.3	90.0	2,479	100
	" " 3	12.5	10.3	53.1	44.9	83.8	2,486	100
	" " 放任 3.9	12.5	9.9	49.8	40.5	81.2	2,673	108
8,000株	腋芽 0	14.4	10.3	65.6	57.5	87.6	2,590	105
	" " 2	13.0	10.8	54.5	47.2	86.7	2,827	114
	" " 3	12.7	10.0	49.1	39.6	80.7	3,055	123
12,000株	腋芽 0	14.9	12.7	68.2	62.4	91.5	2,862	115
	" " 1	14.3	11.9	65.3	57.7	88.2	2,724	110
	" " 2	13.2	10.7	56.1	47.5	84.7	3,147	127

栽植株数と収量、大果重 (S 52年)



栽植株数、腋芽仕立と収量、大果重 (S 52年)



5 残された問題点

12,000株以上の超密植の可能性の検討

6 参考資料

昭和51年、52年岩手県園芸試験場南部分場成績書

7 夏まきサヤエンドウの品種及びは種期

1 背景と特徴

夏秋どりサヤエンドウは、比較的市況が安定しているが、は種期が高温時期となるため一般に収量は低収であることから沿岸地帯の夏期冷涼の気候をいかした夏まき作型の生産安定を目途に品種及びは種期について検討した結果、一応成果が得られたので参考に供し